

# 紀州—神秘の国から日常の風へ—

## 澤田 勝行

薄汚れた鞆に詰め込んだフィルム。

旅へと言うにはあまりにも頼りない靴で、駅へ急ぐ。

首から掛けたローライフフレックスは、これから出逢う何かに胸を躍らせるかのように揺れた。

天気、晴れ。一路南へ歩みを進めると、少しずつ時間が緩やかに、しなやかに紡がれてゆくような気がした。

視線が眩い光へと吸い込まれた。

御坊、湯浅—古くから栄えた路地を歩く。その角の先の風景に胸が躍る。静かな街並、誰かの気配。街の香を嗅ぐうちに、私は一介の他所者であることを忘れ、東の間の住人となる。

一期一会。私はひとときの巡り逢いに感謝をしながら、お辞儀をするように俯いて二眼レフカメラのファインダーを覗く。レンズを向けられた者はまるで私を試すように、鋭い視線を私の瞳へと貫く。

ふと、時間が止まったような気がした。

やがて何かを許容するかのように、その視線は緩やかなものとなってゆく。私は静かにシャッターを押す。

しばしの間、心地好い感覚が私を包んだ。

思い返すに、いつも私は紀州—和歌山の地を望郷の想いで見つめていたように思う。

古いアルバムの中に映る小さな私。水中メガネの海。頼りなげな線路の向こうに広がる山々と静かな町並。そのどれもが私の街には無いものばかりで、その視線からは今以上に、世界が大きな未知の生物のように感じられていた。

少年の私にとって和歌山はすべてを包み込んでくれる大きな揺り籠のようなものであり、それはいつしか心の中にいつも広がる憧憬となっていた。

そしてカメラを手にした私は、「紀州」の日常の情景を見つめることによって、あの頃の記憶と心の中に浮かぶイメージを再構築することを試みたのである。

旅の中で数多の情景と出逢い、フィルムに刻んだ。それは目の前の景色をとっても美しいものに変えた。

名も知らぬ人々の表情が、これ程までに染み渡ったことはなかった。カメラを通し、言葉にならない思いを交わしたようにも思えた。

しかしながら旅人は、この邂逅が東の間の「物語」であることを知ってしまった。どんなに言葉を交わそうと、その土地に我が身を任せようと、あくまでも旅人は一介の他所者に過ぎない。人々との出逢いはその土地のストーリーからも、はたまた人々の日常からも切り離された特異な時間であり、別れの後には一抹の寂しさが風となり、傍らを吹き抜けてゆく。

だが旅人は、その刹那に微かな温もりを感じた。

本当の居場所は決してそこではない。それでも、その土地の日常を彩る人々との邂逅によって、その街ならではの薫り漂う物語を拾い上げてゆく。そうして旅人は、自らが今ここにいることを確かめるのである。

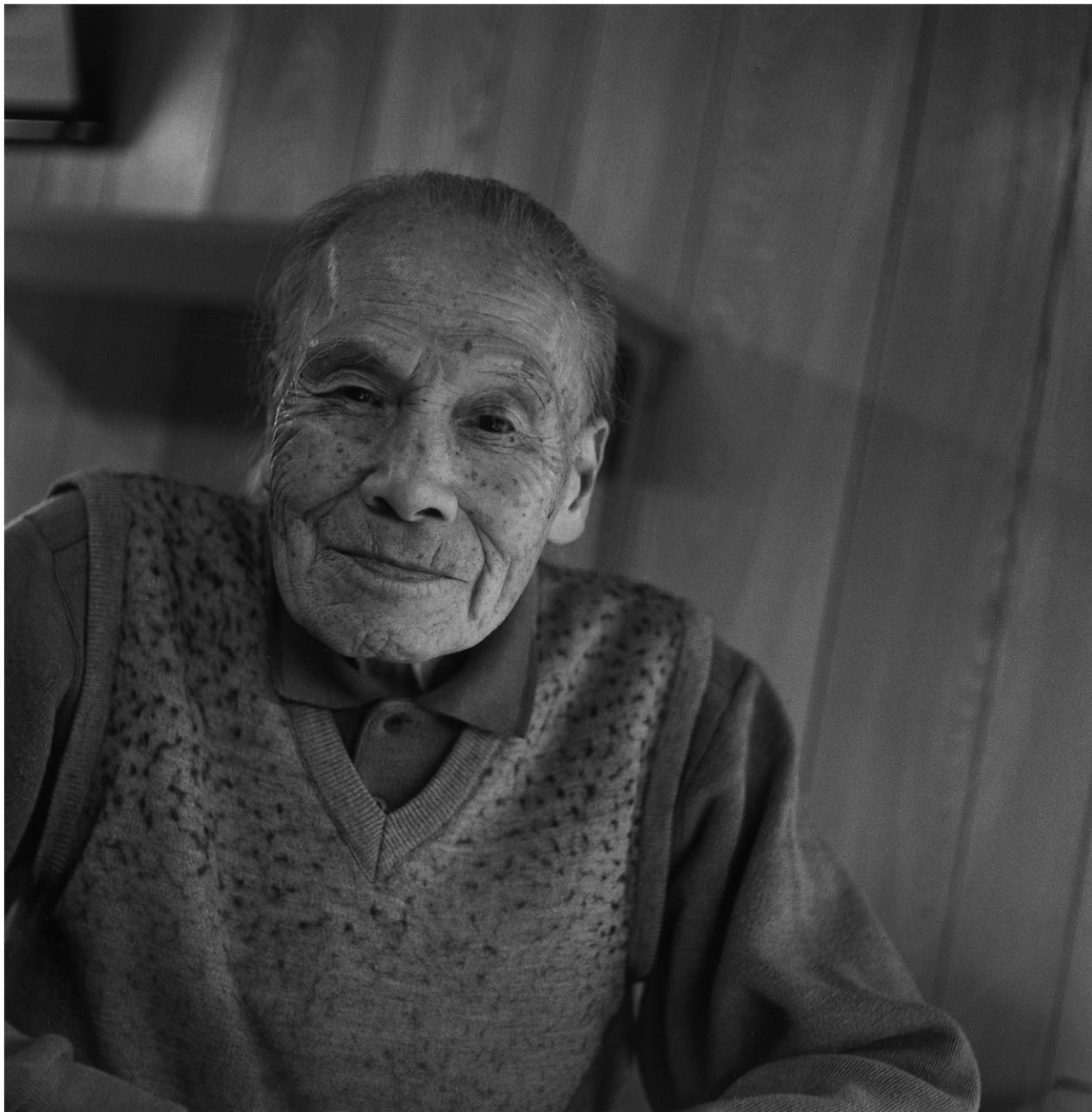
旅という非日常の行為から、見つめ紡ぎ出す日常の情景。写真家はただただ歩き、風を感じ、シャッターを切る。そんな儚く、切なく、そして温かい旅から、写真は生まれた。

時折私は和歌山を旅する夢を見る。それは決まって少年時代の旅の残像である。記憶は脳裏の奥で一滴一滴抽出され、新たな紀州のイメージを織り成し、眠りに落ちた私を夢へと誘う。それは時に現実の情景よりも深く、私の心を打つ。ふと思うに、実はそれこそが私にとっての「紀州」そのものなのかもしれない。

その夢はまるで、私自身の本当の居場所を探し、彷徨いゆくかの如く。

そしてもっと、人々の体温を、気配を、時の薫りを感じられる場所へ、旅は続く。

例えそれが、いつまでも見つからないとしても。



御坊

紀州を巡る旅での一期一会。  
何気ない日常が今、静かに輝き始めた。  
すべての出逢いに感謝し、私は風の如く吹き抜ける。  
あの十字路の先に佇む、新たな出逢いの瞬間を信じて。



貴志川



紀三井寺



御坊



御坊



湯 浅

\*この研究は、平成18年度塚本学院教育研究補助費の助成を受けました。  
貴重な研究の機会を頂戴しましたことに、心より御礼を申し上げます。